エネルギーフロンティアの展望

高エネルギー物理学研究者会議 将来計画小委員会タウンミーティング 「10年先を俯瞰した高エネルギー物理学の将来展望」

東京大学 山下了

マテリアルを頂いた方々(敬称略・順不同) 花垣・徳宿・川本・浅井・山本明・松本重・山本均・栗木・早野・奥木・田窪・竹下・兼村・村山・・・・

これまでのエネルギーフロンティア成果 @ E ~ 0.1 TeV



エネルギーフロンティアが挑む謎

・ 質量の源(ヒッグス機構 + シーソー機構への手がかり?)
・ 真空の相転移(ヒッグス機構)

→ダークエネルギー、インフレーション宇宙になにかつながるか??

- ・階層性問題(ヒッグス・超対称性・余剰次元、、)
- ・ダークマター(超対称性・余剰次元、、)
- ・反物質消滅の原因

(電弱バリオジェネシス・レプトジェネシスへの手がかり?)

力・物質の大統一 →重力を含めた「超大統一」まで?

「神の粒子」ヒッグス

全てを知るはずであるが、1つだけいるとすれば余りにも不自然

全てを知る素粒子?

- ・ 唯一3世代の全ての粒子を区別でき、それぞれが何であるかを「知っている」
- ・元々は別の右巻きと左巻きの世界、別の粒子、を「繋げて」いる
- ・ 通常のゲージ結合でない「新しい相互作用」(湯川力)を持つ
- ・さらに新しい「自己結合」(あるいは違うテクニカラーなど)を持つ
- ・

 宇宙の至る所「真空」に場として充ちている

実験的および理論的にわかっていること

- ・ WおよびZ(ゲージ粒子)との結合をもつ「何か」がある(LEP/Tevatron)。
- ・ 素粒子であればスピン0の中性粒子が必ず1つは存在する
- ・ <u>ひとつの場だとすると</u>、質量領域は理論的には500GeV程度まで、実験的には150GeV 程度までに限定されてきている。
- <u>SUSYのMSSM</u>だと一番軽いヒッグス粒子の質量はさらに極めて強く(140GeV以下)限定されている。

備考

- ・ SUSYでは必ず2つ以上の場(最低でも5つのヒッグス粒子)。
 - 一番単純な場合(MSSM)は2つのヒッグス場=5個のヒッグス粒子群 h0, H0, A0, H+, H-。
- ・ 複合粒子の可能性(新しいカットオフスケール)もあり
- ヒッグス場の構造は新物理からの現象のスペクトラム、ダークマターの組成を決める。

「神の粒子」ヒッグス

ヒッグス機構

ジ相互作用

レプトン

全てを知るはずであるが、1つだけいるとすれば余りにも不自然

ほとんど何もわかっていない

(これまでの実験から多々制限は付いている)

いくつの場か、場の構造は実験的にも理論的にも未定

- ・ 素粒子か?複合粒子か?
- ・ 湯川結合・自己結合は存在するか?
- いくつの場がどう組み合わさってできているか?
- フェルミオンとゲージ粒子の質量の源は同じか?
- アップタイプとダウンタイプは違う場からか?同じ場からか?
- レプトンとクォークは同じヒッグスと結合するか、違うか?
- ・ 3世代が同じ粒子で区別されているのか?違うヒッグスか?
- ・ さらに新しい相互作用か?
- ・ 複数場の場合、CP混合はあるか?

大いなる悩みの種

「いわゆるワインバーグ・サラム・グラショウの<mark>標準理論</mark>」は数ある中での一番 シンプルな場合。ヒッグス粒子は1つ

→ 理論的に非常に不安定。自然には全てがプランク質量に

(階層性問題=理論的大問題)

宇宙論とのコネクション ダークマター

あることはわかっているが正体不明

- ・宇宙観測(望遠鏡・CMB観測)→羽澄氏のお話
- ・地下実験(直接観測)→井上氏のお話
- ・ 生成・測定実験(エネルギーフロンティア)

いろんな新物理模型が暗黒物質 候補を含んでいる (離散対称性) SUSY UED Littlest Higgs with T parity Dark Higgs Radiative Seesaw

$$egin{aligned} \Omega_{
m DM}h^2 &\simeq rac{0.1 {
m pb} \cdot c}{\langle \sigma v
angle} \ &\langle \sigma v
angle & \sim ({
m g}^2/4{
m p})^2/\ {
m m}^2 \end{aligned}$$

新粒子の質量と結合定数の精密測定が ダークマターの正体を解明する



LHCの現状 重心系 7 TeV 2010年 : 約45pb⁻¹収集 • 解析結果はほぼ全て公開 2011年現在 : >1fb⁻¹収集

• Peak luminosity 1.26E33 50ns bunch spacing



 \Rightarrow ~5 interactions per bunch crossing

2012年いっぱい7TeVでデータ収集

2010年標準理論(的)ヒッグス粒子探索の結果

 $\sigma \times BR (pb)$



<u>2011-2012年 LHC ヒッグス探索の予想感度</u>



SUSY List

SUSY particles



SUSY探索の現状



0 lepton + missing ET
Only 165 pb⁻¹

CMエネルギーと、ルミノシティーでの SUSY質量探索範囲(TeV) 5σ発見能力

	$\mathscr{L}(\mathbf{fb}^{-1})$			
\sqrt{s} (TeV)	1	2	5	10
7	0.7	0.8	1.0	1.2
8	0.8	1.0	1.2	1.4
9	0.9	1.1	1.3	1.6

Summary of Beyond SM



現状まとめ

最も不可思議な粒子「ヒッグス」は、もし標準理論「的」であれば 現状 114-150GeV程度(SUSYのMSSMでは90~130GeV程度) →2012年までにLHCで 3~5 σ 以上で 見つかる可能性大!!

SUSYは、もし「Constrained MSSMのMSUGRA的であれば」<u>colorを持つ粒子</u>については、現状0.5~1TeVまで下限が付く。
(まだまだ発見の可能性あるwindowあり。10倍データで解析中LSP、Non-coloredの粒子群は更に制限は低い)
→2012年までにLHCでcolored particlesは
1TeV程度まで5 σ 発見できる。
→13~14TeV運転が始まると2014年には2~2.5 TeVまで発見可

エネルギーフロンティアの計画の行くべき道: 「物理」と「技術」が決める

LHC: 2010~2012年 7~8TeV run 大発見の可能性大!!

→ 2014年より Full Energy Run

→ 2020年頃 <u>アップグレード</u> (ルミノシティー増強) ◎加速器・測定器 アップグレード

ILC: 2010~2012年 技術開発・設計 第二フェーズ(TDP-2)

→ 2012年 加速器工学設計書 (Technical Design Report) 完成
 ◎<u>加速器</u> 詳細設計
 ◎<u>サイト毎の施設設計</u> (国内候補地・海外候補地)
 測定器・詳細設計書 (Detailed Baseline Design)完成

→ LHCの初期データでILCの最初のエネルギー&コストの最適化



The 10 year technical Plan 見直し中



¹⁷



T. Kawamoto

<u>High statistics → High Energy</u>

高輝度化により、実質的に、高いエネルギーのクォークやグルーオンを増やせる: →より高いエネルギーで探索が可能になる。



ルミノシティアップグレードでの物理

☆ まずはとにかくエネルギー(質量)リーチの拡大 ◆ 新現象が発見された場合の精密測定

質量到達範囲の目安(TeV)

(TGCは測定精度)

Process	LHC	SLHC	DLHC	LC	CLIC
	14 TeV	14 TeV	28 TeV	0.8 TeV	5 TeV
	100 fb^{-1}	1000 fb^{-1}	100 fb ⁻¹	500 fb ⁻¹	1000 fb ⁻¹
Squarks (TeV)	2.5	3	4	0.4	2.5
$W_{L}W_{L}(\sigma)$	2	4	4.5	6	90
Z' (TeV)	5	6	8	8^{\perp}	30⊥
Extra-dimens.	9	12	15	5-8.5⊥	30–55⊥
scale (TeV)					
q* (TeV)	6.5	7.5	9.5	0.8	5
Compositeness	30	40	40	100	400
scale (TeV)					
TGC,	0.0014	0.0006	0.0008	0.0004	0.00008
λ_{γ} (95%CL)					



CERN-LHCビーム衝突点収束磁石 KEK-Fermilab Collaboration





物理学会シンポジウム A. Yamamoto SC Technology in LHC/ILC より



衝突点ビーム収束磁石:日本のLHC建設貢献 日(KEK)、米(Fermilab)間の国際協力



High luminosity LHCのイベントが どんな感じかの例:

Charged particle tracks from simulation

普通(以下)のLHC

 $L = 0.2 \times 10^{34} \text{ cm}^{-2} \text{s}^{-1}$ 5 pp collisions / crossing

極端なLHC

$L = 10x10^{34} \text{ cm}^{-2}\text{s}^{-1}$ 400 pp collisions / crossing

T. Kawamotoより

ATLAS Detector upgrade Plan



- Magnet System には変更なし。
- Inner Tracker は全部新しくする(All Silicon, Pixel/Short-Stripの多用)
- Calorimeterは LVL1 Trigger を完全に入替える
- Muon はレートの高いところだけの変更

ILC Accelerator Baseline Parameter for Physics

The BASELINE:

 E_{cm} adjustable from 200 – 500 GeV

Luminosity $\int Ldt = 500 \ fb^{-1}$ in the first 4 years $(L \sim 2x10^{34} \text{ cm}^{-2} \text{s}^{-1})$

e⁻ beam polarization 80%

<u>Upgradable:</u> to ~ 1 TeV with 1 $ab^{-1}/3-4$ years

<u>Options :</u>

- e⁺ polarization >50%

- GigaZ (high luminosity running at M_z and $2M_w$)
- γγ, eγ, e⁻e⁻ collisions

Choice of options depends on LHC+ILC results

[http://www.fnal.gov/directorate/icfa/para-Nov20-final.pdf, Heuer et al]

Superior Characteristics of ILC

- Electron/positron collision (elementary process)
- Fixed Energy & Scan (controllable)
- Controllable beam polarization
- Very sensitive detectors
- Trigger free
- Precise theoretical calculation (<1%)</p>





最も重要なもの=加速器のエネルギー

エネルギー閾値(直接生成に必要なエネルギー)

Higgs生成 M_{HIGGS}+M_Z (~210 GeV for 120 GeV Higgs)
 Higgs自己結合 2 x M_{HIGGS}+M_Z (~330 GeV for 120 GeV Higgs)
 Top quark対生成 350 GeV
 超対称性粒子・ダークマター 2 x LSP (最も軽い超対称性粒子) 質量
 Any pair production 2 x 質量M (Ecm=500GeVならM=250GeVまで)

円形加速器と比較したリニアコライダーの特徴 エネルギー拡張性

.



Global Collaboration

focusing on SCRF



;lr iit

加速器ユニットとしての性能の進展 in progress at TESLA/FLASH toward EuroXFEL



・9連空洞 x 9:加速器ユニットとしては、30 MV/mのレベル、 >> さらに開発、性能の向上/安定性への努力



2010,9.12, A. Yamamoto "SC Technology in LHC/ILC"より

S1-Global Module C (DESY, FNAL cavities)



Cryomodule and cavities were arrived at STF on Jan. 2010.

Final Results in 2010 continuous beam operation

The final beam size was measured with IP-BSM (Laser Interferometer)

(東大·駒宮研、KEK、他)





In the continuous operation, we achieved the 0.87 of the modulation depth at 8.0 deg. Mode.

The evaluated vertical beam size is 310 + -30 (stat.) +0-/40 (syst.) nm. (The design beam size is 114nm for ey=13pm.)

日本物理学会シンポジウム 「KEK ATF2でのビーム収束」 奥木氏スライドより

Particle Flow Analysis (developed at LEP) ジェットのエネルギーを精度よく決めるために



ILCでの測定器(提案例)







特別推進研究 ILC測定器 (代表:山本均) 採択(H23-27)

ILC 実験の基本理念 事象をファイマン図を見るがごとくに見る



LHC測定器の1桁上を行く性能を目指して With respect to detectors at LHC:

Vertex Detector	
Inner layer	3∼6 times closer to IP
Pixel size	1 / 30
Materials	1 / 30
Tracking Detector	
Materials in Tracker	1 / 6
Track mom. resolution	1 / 10
Calorimeter	
EM cal granularity	1 / 200

Impact Parameter resolution: < 5mm + 10mm / p(GeV) sin^{-3/2} q
 Jet energy resolution: dE/E < 0.3 / √E(GeV)
 Excellent Hermeticity: down to q < 5--10 mrad (active mask)

- 九州 国内の候補地
 - 背振山地
 - 先端基礎科学次世代加速器研究会(2007発足)
 - 九州大学、佐賀大学、福岡県、佐賀県
 - 九大・佐賀大合同組織、自治体の推進室設置
 - 地質調査(基礎資料・済)、産学連携を推進中
- 東北
 - 北上山地
 - 東北加速器基礎科学研究会(2009発足)
 - 東北大学、岩手県、宮城県、東北経済界
 - ボーリング調査、分析中
 - 岩手県: 復興構想会議にTOHOKU科学技術特区の中核としてILCを提案(2011年5月~)








ILC Timeline beyond 2012 by ILCSC/ICFA



ヒッグス(これだけで十分新物理だが) と 更に越える新物理

6つのシナリオ (a la 兼村@2010秋の物理学会シンポジウム)

さまざまな可能性 (2010秋・物理学会シンポでの兼村氏のトーク)

	light H	heavy H	no H	NewParticle
シナリオ1	X			X
シナリオ2		X		X
シナリオ3			X	X
シナリオ4	X			
シナリオ5		X		
シナリオ6			X	

light H: 114GeV < m_h < 150 -200 GeV (LEPにコンシステントな領域) heavy H: 150-200 GeV < m_h (LEPと一見矛盾する領域)

ヒッグスが? (軽い、重い、何もなし) それ以外は兆候なしの場合

シナリオ6 (No-Higgs×No-NP)

- ヒッグスも何もなければ、ツリーレベル・ユニタリティからTeV以上で電弱理論は強結合になる
 - この場合は理論の予言能力がなくなる
- あるいは、新粒子がヒッグスの代わりにユニタリティを救う(例:ヒッグスレ ス模型)
- そのスケールに次世代加速器実験で直接間接に到達可能なはずだが。。。。見つからない。。。。。。
- いずれにせよ、新物理の存在は確定的
- 興味深いシナリオだが...
- LHC(初期)で発見の成果がないシナリオ

→もっとリーチが必要?または何か見落とし?見えない?

 10年後のエネルギーフロンティアのシナリオを描きにくいシナリオ
 (物理研究としては本来はこの場合、フロンティア実験が正に「必須」で TeVまでに確実になにかあることはわかっていても何かと明確に言えない)

シナリオ5 (Heavy-Higgs×No-NP)

- ヒッグスは重いところに見つかった
- 他に何も見つからない
- Low Λ シナリオ
- 重いヒッグスはLEPと矛盾
 - ⇒ 必ず何か新しいダイナミクス がTeVになければならない

TeV領域の新粒子を発見せよ! – SLHCでエネルギーリーチを!!



シナリオ4 (light-Higgs×no-NP)

- ・ LEPとコンシステントなシナリオ
- Very high A までSMは生き残れる?

<mark>ヒッグスはSMか?新物理か?</mark> ストリングスケールまでSM?

- 階層性問題は残る
- 暗黒物質、ニュートリノ質量、宇宙の バリオン非対称も謎のまま
- GUTも無理,.....



TeV領域でNPがあって"ほしい"

- ヒッグスの精密測定(ILC)→ 質量起源を決定,新物理を発見する
- もしNPのスケールがマルチTeV以下なら直接に探索可能(SLHC)
- SM結合の精密測定で間接的に探索

質量起源の決定への道

LHC, HL-LHCでの結合定数測定(標準理論的なヒッグスの場合)



M_H < 140GeV での主崩壊モード(bb)もSLHCでも測れる(>30%)
 → ILCで約2%レベルまで測る→新物理へ

※LHC(ハドロンコライダー)では比のみが決まるため、結合定数決 定には理論的な仮定が必要

→ILCで絶対値を精密に測ることから更に新物理へ

ヒッグス=ファクトリー 'Higgs-strahlung' Events Events $e^+e^- \rightarrow ZH, Z \rightarrow \mu\mu, ee$ a) ZH→u⁺u⁻X Н e Signal+Background 100 Fitted signal+background Signal Fitted background 50 μμ

Ť15

120

125

130

135

m_{recoil}/GeV

140

- **Z**を検出、反跳質量を見る。 $m_{\text{recoil}}^2 = (P_{e+e-} P_Z)^2$
- ヒッグスの崩壊を見ずに、ヒッグスの質量と生成断面積を測定。
- そしてヒッグス崩壊を検出 → ヒッグス分岐比の絶対測定
- ヒッグス・ファクトリー:1日で5sのシグナル

ヒッグス粒子の性質を徹底的に分析









重いヒッグス粒子 質量領域の決定





ヒッグス質量と自己結合、new physics

宇宙論とのコネクション

hhh結合のSMからのずれの大きさ = 電弱相転移が強い一次的



- SUSYヒッグスセクターの区別
 - MSSM (2 Higgs doublets)
 - •MSSM + singlet (µ問題)
 - •MSSM +triplets (Type-2 Seesaw)
 - •4DSSM+charged singlets

(SUSY Radiative Seesaw)

- SUSY粒子が重くて直接見れなくても一番 軽いヒッグスhの質量とhhh結合を測るこ とで各模型を区別できる



S.Kanemura, Y. Okada, E. Senaha (2006)



S.Kanemura, T. Shindou, K. Yagyu, arXiv:1009.1836[hep-ph]

これらの検証にはhhh結合をO(10)%で測ることが必要

新物理 が 直接生成・検出領域にある場合

 LHCではcolored new particleが エネルギーリーチにある時
 ILCでは Ecm > 2 x LighestNewParticle (pair production)

シナリオ1 (light-Higgs×NP-found)

- 私たちにとってベストのシ ナリオ(沢山の発見)
- いろいろなTeV領域の新物 理模型がある
 - SUSY, Little Higgs, UED, これらを区別する!
 - 質量の測定(スペクトル)
 - スピンの測定
 - 結合定数の測定





Kakizaki, Matsumoto, Senami (2006)

シナリオ2 (heavy-Higgs×NP-found)

- LEPに必ずしも矛盾しない
- MSSMではない新物理(Low A)
- マルチTeVスケールで理論が強 結合になるダイナミカルな模型
 - Techniocolor
 - Fat Higgs models (SUSY)
- SLHCでのTeVの直接探索
- ILCでの重いヒッグス、New particlesの精密測定

SUSY but "Fat" Higgs ... Harnik, Kribs, Larson, Murayama (2004)

ヒッグスはマルチTeVで複合場に 低エネルギーでヒッグス H1, H2, S Next-to MSSM (NMSSM)になっている

MSSMと異なりヒッグス質量は ツリーで重くなれる

 $m_h^2 \simeq m_Z^2 \cos^2 2\beta + (\lambda_{HHS}^2 v^2/2) \sin^2 2\beta + \delta m_{\text{loop}}^2$

SLHCによる重いヒッグス粒子の直接測定 ILCによる精密測定でスペクトル調べる

$$M_{H^{\pm}}^2 = M_A^2 - \lambda^2 v^2$$



シナリオ3 (No-Higgs×NP-found)

 Lee Quigg Thacker(1977) によるツリーユニタリティの概念では、ユニタ リー性の為に1TeVまでにヒッグスが在るはず(あるいはTeVで強結合 理論になり予言能力なくなる)

ヒッグスができていてもLHCでは見えてないだけ? インビジブルなヒッグス崩壊 ダークマター 余剰次元(Radion混合)

他の可能性(ヒッグスレス) 例)ベクトル場W'の導入によりユニタリティ救う → ヒッグスレス模型

ヒッグスポータルダーク

DMがヒッグスを通じてのみ 標準模型と相互作用する

 $L = C_{DM} DM^2 |\Phi|^2$ の形 このようなシナリオは DM以外の新粒子が重い場合 に現れる(DM: Z,パリティ)

Joupling constant cs

10⁻²

10⁻³



30fb⁻¹, E=14TeV Br > 0.50 (95%CL)

DM DM 500fb^{-1} , E = 350 GeV

10

55

ILC



10 10 10 10² 10^{2} 10^{2} 10 10^{3} 10 10 10 Dark Matter Mass (GeV) Dark Matter Mass (GeV) Dark Matter Mass (GeV) SK, S. Matsumoto, N. Okada, T. Nabeshima, 2010

 $m_{DM} < m_{H}/2$ なら Invisible 崩壊

ヒッグスのインビジブル崩壊

- ヒッグスポータル模型:ヒッグス が暗黒物質に崩壊
- 余剰次元:ヒッグスがRadion(見 えない)に崩壊
- ILCではリコイル測定により模型
 に依存しない(ヒッグスの崩壊に
 依存しない)解析が可能



$$e^+$$
, $H \rightarrow X$
 e^- , $Z \sim \mu_{\mu}$

$$m_X^2 = p_X^2$$

= $s - 2\sqrt{s}E_Z + m_Z^2$
= $s - 2\sqrt{s}E_{\mu\mu} + m_{\mu\mu}^2$

ILCの み 可能 新粒子ファクトリー



ダークマターをもたらす模型はどれも似たシグナルを持つ





新粒子のスペクトルの例

新粒子のスペクトルを調べて新物理の模型を
 区別、決定することができる





500

500





ILCにおけるテラスケールの物理

~新しい対称性の証明~



Using the M(lightest SUSY particle) from ILC



Significant improvements even if only m(LSP) is measured at ILC

Strong correlation at LHC An input from ILC resolve this correlation





LHC/LC report

SUSY パラメータの測定

Chargino は Wino と Higgsino の混合:

$$(\tilde{W}^{+}, \tilde{H}^{+}) \begin{pmatrix} M_{2} & \sqrt{2}m_{W}\cos\beta \\ \sqrt{2}m_{W}\sin\beta & \mu \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \tilde{W}^{-} \\ \tilde{H}^{-} \end{pmatrix}$$

- 偏極電子(e⁻_R)を使う:
 - Chargino の Higgsino 成分が chargino 対生成に寄与
 - 右巻き selectron の対生成は Bino に依存
- 下の測定から $(M_1, \tan\beta, M_2, \mu)$ を導出 $\sigma(e^+e^-_R \to \tilde{e}^+_R \tilde{e}^-_R) \quad \sigma(e^+e^-_R \to \tilde{\chi}^+_1 \tilde{\chi}^-_1)$ $m(\tilde{\chi}^+_1) \quad m(\tilde{\chi}^0_1)$



水素などの物質

暗黒エネルギー

73%

暗黒物質の正体解明

暗黒物質は一番軽い超対称粒子か?

右巻きニュートリノ質量のスケール (レプトジェネシスのシナリオ)

- シーソー機構

 非常に高いスケールのマヨラ ナ質量をもつ右巻きニュート リノを導入
- レプトジェネシス

 右巻きニュートリノのCP破れ 相互作用を通じた崩壊による レプトン数生成
 スファレロン過程
 - バリオン数に転化

第3世代スカラーニュートリノの質量



[A. Freitas, W. Porod, P. M. Zerwas, 2005] 繰り込み群に対する, ニュートリノセクターの │ 第3世代の湯川結合の影響を見る!

D_n~log(M_{GUT}/M_{RN}) D_n= Slepton の質量²の差で表せる

LHC/ILCでスレプトン質量の精密 測定をすることにより、重い右巻 きニュートリノのマヨラナ質量に対 する情報が得られるかもしれない



E (GeV)

104

10³

10²

~ Leptogenesis ~

右巻きマヨラナニュートリノ崩壊 →宇宙のレプトン数 → スファレロン過程 → 宇宙のバリオン数

右巻きマヨラナニュートリノ質量 ~ GUT スケール!



まとめ (兼村流仕分け+将来計画小委員会2011/6月)

	light H	heavy H	no H	NewParticle	HL-LHC	ILC
シナリオ1	Х			X	0	0
シナリオ2		X		X	0	\bigcirc
シナリオ3			X	X	0	\bigcirc
シナリオ4	X				Δ	\bigcirc
シナリオ5		X			Ô	Δ
シナリオ6			X		\bigcirc	?

二者択一という意味ではありません

新たな粒子、現象の発見	ハドロンコライダー HL-LHC	
精密測定とラグランジアンの構成	レプトンコライダー ILC	

High Energy LHC by 2035?

The High Luminosity LHC or HL-LHC is the route that will enable the way to the Farthest Energy Frontier : an HE-LHC based on 20 T magnets for a 33 TeV c.o.m. collider

HE-LHC Workshop 14-16 October in Malta



物理学会シンポジウム A. Yamamoto SC Technology in LHC/ILC より

KEK's R&D effort toward LHC Upgrade Nb₃AI: High Field Conductor w/ high strength

機械的に安定、Nb3Snに近い超伝導特性(高臨界磁場、高臨界温度) 日本独自の技術:物質材料科学研究機構によるオリジナルな開発





CLIC Compact Linear Collider (Two-beam accelerator)

Aiming for Multi-TeV Linear Collider


CLIC (Compact Linear Collider) drive beam accelerator drive beam accelerator 2.38 GeV, 1.0 GHz 2.38 GeV, 1.0 GHz 1.4.--CR2 CR2 6C2 🧖 - T T T T T 808 808 210200 e" main linac main linaci 12 GHz (Centrelle) TA care. 1.5.5 48-3 km e- injector, e* injector, е^т РОЯ 2.86 GeV ก็ก 2.86 GeV ς. ς.

- **CERNが推進**
- 低エネルギー高電流のビームの電場で高エネルギー低電流 のビームを加速

0R

L 1 .

PDR

- 衝突エネルギー: 500 GeV→3TeV
- 2011年にCDR
- ILCと緊密に協力(特に物理と測定器)



まとめ (兼村流仕分け+将来計画小委員会2011/6月)

	light H	heavy H	no H	NewParticle	HL-LHC	ILC
シナリオ1	Х			X	0	Ô
シナリオ2		X		X	0	\bigcirc
シナリオ3			X	X	0	\bigcirc
シナリオ4	X				Δ	\bigcirc
シナリオ5		X			Ô	Δ
シナリオ6			X		\bigcirc	?

二者択一という意味ではありません

新たな粒子、現象の発見	ハドロンコライダー HL-LHC	
精密測定とラグランジアンの構成	レプトンコライダー ILC	